

「イエシュアについての証言」

ヨハネの福音書 5:31~47

1. 証言

5:31 もしわたしだけが自分のことを証言するのなら、わたしの証言は真実ではありません。

この 31~39 節の中に 12 回も使われている言葉があります。「証言」という言葉です。ヘブル語でエードゥート(תּוּדָה)、そして「証言する」という動詞はワード(וָדַע)と言い、本来は「警告する、戒める、」という意味で使われています。ヘブル語は動詞が主体の言語ですので、このワードについて考えてみたいと思います。

創世記

43:3 しかしユダが父に言った。「あの方は私たちをきつく戒めて、『あなたがたの弟といっしょでなければ、私の顔を見てはならない』と告げました。

ワードが聖書で最初に用いられた場面は、創世記 43:3 で、アブラハム、イサク、ヤコブの子で、兄たちの妬みを買ひ、エジプトに奴隷として売られて行ったヨセフが、神様の不思議な導きにより、エジプトの宰相（総理大臣）にまで上りつめます。そのヨセフが、その事実を知らずに食料を求めてやって来た、かつて自分を売り飛ばした兄たちに告げた戒めです。そのワード、その戒めとは「私の顔を見る」ことに関するものでした。それはすなわち「入国許可」を示すものでした。



創世記

42:34 そしてあなたがたの末の弟を私のところに連れて来い。そうすれば、あなたがたが間者ではなく、正直者だということが私にわかる。そのうえで、私はあなたがたの兄弟を返そう。そうしてあなたがたはこの地に出はいることができる。』

ワード(וָדַע)を形成する文字アイン(ע)は「目、見る」を意味し、そしてダーレット(ד)は出入りするための「門」を象った文字で、この出来事と密接な関係を持った言葉であることが解ります。日本語の「証言」という言葉は、裁判や審判的なイメージが強いのですが、このようにワードは入場券、入国ビザやパスポートのような概念を持っています。イエシュアがここで語られた証言、ワードが示す概念である「入国許可」とは、やはり神の国、御国のことだと考えられます。このように「証言」と訳されたワードを、真偽を決めるものとしてではなく、御国に入り、神様を仰ぎ見ることを目的とした言葉であると捉えて、この後に続く「証言」についてのイエシュアの言葉を考えてみたいと思います。

5:32 わたしについて証言する方がほかにあるのです。その方のわたしについて証言される証言が真実であ

ることは、わたしが知っています。

先ほどの創世記 43:3 が示すように、この「証言する」と訳された言葉ワードには「顔を見る」ことに関する戒め、決め事であると述べました。ここに記されている「わたしについて証言する方」すなわちイエシュアについて証言する方、すなわちイエシュアを見る方、そしてその方はイエシュアによって証言される方、すなわちイエシュアが見ておられる方であることが強調されています。つまりその方とイエシュアは互いに証言し合う関係、見つめ合う関係にあるということです。その方が御父、父なる神様であることは言うまでもありません。

2. ヨハネ

5:33 あなたがたは、ヨハネのところに入りましたが、彼は真理について証言しました。

この「あなたがた」とはユダヤ人たちのことです。ですからここでイエシュアが語られていることは、ユダヤ人たちに向けられたものであることを覚えなければなりません。

ヨハネ

1:19 ヨハネの証言は、こうである。ユダヤ人たちが祭司とレビ人をエルサレムからヨハネのもとに遣わして、「あなたはどなたですか」と尋ねさせた。

そこでヨハネ、すなわちバプテスマのヨハネはイエシュアを見、こう言いました。



ヨハネ

1:29 …ヨハネは自分のほうにイエスが来られるのを見て言った。「見よ、世の罪を取り除く神の小羊。」

1:34 …私はそれを見たのです。それで、この方が神の子であると証言しているのです。」

この 1:34 にも「証言する」すなわちワードが使われています。ワードは「戒め、警告」するという意味です。イエシュアによって罪が取り除かれること、イエシュアが神様の御子であること、これは私たち人間が救われる、すなわち神の国に入るためには決して無視できない絶対の真理なのです。ヨハネはそのことをワード「戒め、警告」しました。

5:34 といっても、わたしは人の証言を受けるものではありません。わたしは、あなたがたが救われるために、そのことを言うのです。

しかしヨハネの証言をイエシュアは必要としないと言われています。イエシュアは「世の罪を取り除く神の小羊」であるというのがヨハネの証言です。しかし罪のない神の御子であるイエシュアは、罪を取り除く必要がありません。ですからここでイエシュアが言われている通り、ヨハネの証言とは、イエシュアが「世の罪を取り除く神の小羊」であり、「神の子」であるこの証言すなわちワードを、あなたがたユダヤ人たちが聞いて、

それを信じて救われるためのものであるとされているのです。

3. ともしび

5:35 彼は燃えて輝くともしびであり、あなたがたはしばらくの間、その光の中で楽しむことを願ったのです。

かつてヨハネは自分を指してこう言いました。

ヨハネ

1:23 彼は言った。「私は、預言者イザヤが言ったように『主の道をまっすぐにせよ』と荒野で叫んでいる者の声です。」

しかしここでイエシュアは彼を「燃えて輝くともしび」にたとえました。「ともしび」はヘブル語でラッピード(רִפִּייד)と言います。このラッピードが聖書で最初に用いられた箇所を見てみましょう。

創世記

15:17 さて、日は沈み、暗やみになったとき、そのとき、煙の立つかまどと、燃えているたいまつが、あの切り裂かれたものの間を
通り過ぎた。

15:18 その日、主はアブラムと契約を結んで仰せられた。「わたしはあなたの子孫に、この地を与える。エジプトの川から、あの大川、ユーフラテス川まで。

15:19 ケニ人、ケナズ人、カデモン人、

15:20 ヘテ人、ペリジ人、レファイム人、

15:21 エモリ人、カナン人、ギルガシ人、エブス人を。」



これは神様がアブラムと契約を結ばれた時の場面です。ここで燃えている「たいまつ」がラッピードです。ここで神様がたいまつ、ラッピードによってアブラムと交わされた約束は、ユーフラテス川からエジプトの川（ナイル川）までの土地を子孫たちすなわちユダヤ人たちに与え、異邦人たちを支配するというものでした。その約束は聖書に記された歴史においても、そして今現在に至るまで、未だ一度も果たされてはいません。この約束は終わりの日に、神様のご計画の完成として成就するものだからです。メシア王国、千年王国と呼ばれるものがそれです。

黙示録

20:4 また私は、多くの座を見た。彼らはその上にすわった。そしてさばきを行う権威が彼らに与えられた。

また私は、イエスのあかしと神のことばとのゆえに首をはねられた人たちのたましいと、獣やその像を拝まず、その額や手に獣の刻印を押されなかった人たちを見た。彼らは生き返って、キリストとともに、千年の間王となった。

20:5 そのほかの死者は、千年の終わるまでは、生き返らなかった。これが第一の復活である。

20:6 この第一の復活にあずかる者は幸いな者、聖なる者である。この人々に対しては、第二の死は、なんの力も持っていない。彼らは神とキリストとの祭司となり、キリストとともに、千年の間王となる。

神様がアブラハムと交わされた約束は、イエシュアを王とし、ユダヤ人すなわちイスラエルを中心とした中央集権国家です。その場所がこのユーフラテス川からエジプトの川までの土地であると考えられます。この場所から、イスラエルからイエシュアは王として世界を治められるのです。しかし「千年の間」とあるように、この王国は永遠ではありません。ですからこの 5:35 でイエシュアは「しばらくの間」と言われていると考えられます。

このように、イエシュアはヨハネをともしび、ラッピードにととえて、神様がアブラハムと交わされた契約を指し示されたと考えられます。このイスラエル王国の再興、選ばれた民としての存在の回復の約束は、その歴史の中で長きに渡り外国の侵略、支配、迫害、圧政に苦しめられてきたユダヤ人たちの唯一の希望です。イエシュアはまさにそのために来られた「神の子」メシアであることを示しておられると考えられます。

4. わざ

5:36 しかし、わたしにはヨハネの証言よりもすぐれた証言があります。父がわたしに成し遂げさせようとしてお与えになったわざ、すなわちわたしがやっているわざそのものが、わたしについて、父がわたしを遣わしたことを証言しているのです。

「証言よりもすぐれた証言」それを私たちは一般的に「証拠」と呼んでいます。人の証言は、誤解や偏見、様々な意図や考えにより、偽り、間違いが生じることが可能性としてあります。しかし「証拠」にはそれがありません。その「証言よりもすぐれた証言」である「証拠」をイエシュアは「わざ」と呼んでおられます。ヘブル語でマアセ(הַשָּׂעָה)、そして動詞ではアーサー(הִשָּׂעָה)「～する、実行する、つくる」という意味の言葉です。アーサーは最初、創世記でこのように用いられました。

創世記

1:7 神は大空を造り、大空の下の水と、大空の上の水とを区別された。そのようになった。

天地創造の御業において、神様は水を上と下に分けられ、区別されました。これがアーサーの語源となる出来事です。つまりアーサーは「分ける、区別する」という概念を持っているのです。イエシュアが行われたわざといえばやはり病の癒しが挙げられますが、全ての病人を癒したわけではありません。病人は誰もが癒されたいと願っています。しかしイエシュアは明らかにそれを限定、区別して癒しておられます。ベテスダの池には多くの病人が臥せていました。しかし癒されたのは 38 年の間臥せていたあの人ひとりだけでした。イエシュアはユダヤ人ではなく、サマリア人のしかも夫が 5 人もあったというやもめに対して、ご自分がメシア

であることをはっきりと語られました。このように、イエシュアの「わざ」とは、癒すことや救うことにあるのではなく、「分ける、区別する」すなわち「裁く」ことにあるのです。神の国に入る者と、入らない者すなわち滅ぶべき者とを「分ける」裁くことが、イエシュアの証言、ワードすなわち「戒め、警告」であり、「わざ」をアーサー「実行する」御方であることを示されたと考えられます。

5. 御父の証言

5:37 また、わたしを遣わした父ご自身がわたしについて証言しておられます。あなたがたは、まだ一度もその御声を聞いたこともなく、御姿を見たこともありません。

5:38 また、そのみことばをあなたがたのうちにとどめてもいません。父が遣わした者をあなたがたが信じないからです。

そして何より誰より御父である神様こそが御子であるイエシュアの証言者です。まさに究極の最強の証言者です。イエシュアにとってこんなにも心強い味方はいません。むしろこの御方が味方でいけば、たった一人でたとえ全世界が敵になろうが悪魔だろうが怖いものなしです。しかしここで大きな問題があります。この最強の証言者である御父は、人の目では見ることができず、その声、すなわち実際の証言も聞くことができないのです。そしてそれが見える形、聞こえる声となられたのがイエシュアです。つまりイエシュアが神の御子であることを信じずして神様を見ることも聞くこともできないのです。

ヨハネ

14:9 イエスは彼に言われた。「ピリポ。こんなに長い間あなたがたといっしょにいるのに、あなたはわたしを知らなかったのですか。わたしを見た者は、父を見たのです。どうしてあなたは、『私たちに父を見せてください』と言うのですか。

そしてその御父の御言葉である聖書も理解することができません。今日多くの考古学者や歴史、文化、語学の学者や研究者が熱心に聖書を調べ、その議論が絶えません。しかしイエシュアを信じずしてこの聖書を理解することはできないのです。なぜなら聖書は全てイエシュアについて書かれたものだからです。

5:39 あなたがたは、聖書の中に永遠のいのちがあると思うので、聖書を調べています。その聖書が、わたしについて証言しているのです。

5:40 それなのに、あなたがたは、いのちを得るためにわたしのもとに来ようとはしません。

ここに人の求めるものがたった一つのものであることが記されています。それは「永遠のいのち」です。人は何よりも死を恐れます。死にたくないから食べ、飲み、働き、休むのです。時々「死にたい」と言っている人がいます。実際に自殺する人もいます。しかしそれはこの世ではなく、別の世界で生きることに対する憧れであり、つまり現実逃避です。死にたいと思う人もやっぱりもっと良い環境で生きたいのです。その永遠のいのちは、イエシュアを通してでしか得られないのです。

6. 栄誉

5:41 わたしは人からの栄誉は受けません。

イエシュアは人からの栄誉ではなく、神様からの栄誉を受けたいと願っておられます。その栄誉とは人が与えるそれとは比べ物にならないくらい素晴らしいものだからです。

ピリピ

2:9 それゆえ神は、この方を高く上げて、すべての名にまさる名をお与えになりました。

2:10 それは、イエスの御名によって、天にあるもの、地にあるもの、地の下にあるもののすべてが、ひざをかがめ、

2:11 すべての口が、「イエス・キリストは主である」と告白して、父なる神がほめたたえられるためです。

神様のご計画の成就、神の国の到来がどれほど素晴らしいものであるかが理解でき、信じられるならば、この世で受ける「人からの栄誉」に興味がなくなります。人からの栄誉とは、何も表彰されたり、有名になることだけではありません。人から褒められたい、良く思われたい、感謝されたい、自分の存在を認めてほしい、つまり愛されたいという欲求です。この欲求故に人は人の目を気にし、人を恐れます。またこの欲求が満たされないと、なんとかそれを得ようとして悲しみや、苦しみを表し、時に怒ったりもします。しかしそんな悲しみ苦しきは、やがて来ようとしている御国の素晴らしさを知れば、取るに足りないものになるとローマ人への手紙にこうあります。

ローマ

8:18 今の時のいろいろの苦しきは、将来私たちに啓示されようとしている栄光に比べれば、取るに足りないものと私は考えます。

イエシュアはその神様のご計画の完成、神の国の素晴らしさを知っていたが故に、「人からの栄誉」を受けたいという欲求から、全く解放されていました。

7. 愛する

5:42 ただ、わたしはあなたがたを知っています。あなたがたのうちには、神の愛がありません。

「神の愛がない」つまり神様を愛していないということですが、もう何度も述べていますがヘブル語で「愛する」はアーハヴ(אהב)です。「神様」を意味する文字アーレフ(א),「見る、生きる」ことを意味するヘー(ה),そして神の「家」御国を示すベート(ב)が組み合わさった言葉です。ですから愛するとは「神様が見る(生きる)家(御国)」のご計画をともし、そしてそこに生きることであり、その計画、その事実を知らずして、そしてそれを信じずして神様をアーハヴ「愛している」とは言えないのです。

5:43 わたしはわたしの父の名によって来ましたが、あなたがたはわたしを受け入れません。ほかの人がその人自身の名において来れば、あなたがたはその人を受け入れるのです。

5:44 互いの栄誉は受けても、唯一の神からの栄誉を求めないあなたがたは、どうして信じることができますか。

私たちのこの社会は、人を受け入れ、人に受け入れられ、相互に繋がることによって生活できる仕組みで成り立っています。つまり「人からの榮譽」を受けずして生きることができないのです。人に依存し、人を信頼している考え方、生き方は、神様のご計画である神の国、御国ではなく、今のこの世に目を向けさせ、神様ではなく人を見、神様ではなく人に見られることを重要視しながら生きることです。これではアーハヴ、神様を愛することなど到底できないことだとイエシュアは語られました。神様を信じ、その教えに従っていると豪語しているユダヤ人たちに対して、その誤りを指摘されました。

8. 誤解

5:45 わたしが、父の前にあなたがたを訴えようとしていると思っはなりません。あなたがたを訴える者は、あなたがたが望みを置いているモーセです。

モーセ、すなわち彼が神様から受け取った十戒を初めとする律法の数々、それは一見どれも「命令と禁止」の事項であり、そしてその違反に対する措置についてまとめられた、いわゆる「法」です。ユダヤ人たちは更にこれに「口伝律法」という細則を設け、これに縛られて彼らは生きていました。

5:46 もしあなたがたがモーセを信じているのなら、わたしを信じたはずで。モーセが書いたのはわたしのことだからです。

イエシュアは、律法は「命令と禁止」の事項ではなく、ご自分について書かれたものであると述べられました。たとえばこういうことです。律法の中で最も大切な戒めは

マタイ

22:37 そこで、イエスは彼に言われた。『心を尽くし、思いを尽くし、知力を尽くして、あなたの神である主を愛せよ。』

22:38 これがたいせつな第一の戒めです。

22:39 『あなたの隣人をあなた自身のように愛せよ。』という第二の戒めも、それと同じようにたいせつです。

22:40 律法全体と預言者とが、この二つの戒めにかかっているのです。」

ということですが、これを命令として捉え、それを違反することなく完璧に守り続けることが果たして人間に可能でしょうか。こんな無理難題を神様は人に押し付けられたのでしょうか。そうではなく、これはイエシュアが言われた通り、ご自身がどのような御方であるかを記しているのです。つまりこういうことです。

・イエシュアは、「心を尽くし、思いを尽くし、知力を尽くして、神である主を愛する」

・イエシュアは、「隣人（すなわち異邦人）をご自分（すなわちユダヤ人）のように愛する」

ここでの「愛する」もヘブル語で、アーハヴの概念で捉えるならば、このように解釈することができます。

・イエシュアは、「心を尽くして、思いを尽くして、知力を尽くして神の国、御国を求める。」

・イエシュアは、「異邦人もユダヤ人もともに御国におらせる」

となります。「律法全体と預言者とが、この二つの戒めにかかっているのです。」イエシュアがいかに御国にいのちをかけ、求めておられる方であるかが解ります。イエシュアとは、そのような御方なのです。

5:47 しかし、あなたがたがモーセの書を信じないのであれば、どうしてわたしのことばを信じるでしょう。」ユダヤ人たちは、モーセの書すなわち律法すなわち聖書を信じていないわけではありませんでした。ただ「禁止と命令」の事項として、誤った捉え方、信じ方をしていたのです。だからイエシュアの言葉が信じられない、受け入れられなかったのです。私たちはどうでしょうか。このユダヤ人たちのように、聖書を自分の人生における「禁止と命令」の書物にしてしまっていないでしょうか。だとすれば私たちはこの大きな誤解から抜け出さなければなりません。「心を尽くして、思いを尽くして、知力を尽くして御国を求める」ために聖書は存在するのです。